

# 「乳がん術後連携パス」にご協力いただける先生へ

## 1. 対象患者について

乳がん術後連携パスの対象患者さんは、原則として以下のすべてを満たす方としています。

- ・ 乳がん治癒切除術後
- ・ 告知済み
- ・ 直近の検査で異常なし

## 2. 診療していただく時期

術後3～6ヶ月以降を基本としています。

## 3. かかりつけ医の先生の診療時

患者さんに以下のものを持参していただきます。

- ・ 乳がん術後連携パス（患者用手帳）

診療時には、投薬と可能な範囲での検査等をお願いします。その場合、近畿大学病院での検査を省略します。また血液検査は必要に応じ、適宜お願いします。

また、患者さんには「乳がん術後連携パス」（患者用手帳）をお渡しし、自己チェックで気になることや日常の健康管理で気になることがあれば、かかりつけ医の先生に相談するよう伝えておりますので、よろしくをお願いします。

### 【術後経過観察について】

ホルモン療法剤服用中に副作用の発現が懸念された場合には、適宜2-4週間程度休薬して頂ければ幸いです。再開に当たっての判断に迷う時は、当院への受診をご指示下さい。

また、他の慢性疾患などが発症した場合には、かかりつけ診療の一貫として治療をお願いします。以下に一般的な留意点を記載します。気になる点があれば、遠慮なく当院へご連絡下さい。

#### \* 理学所見

問診では、新しく出現した症状や持続する症状、増強する症状に注意します。一過性の症状は問題にならないことが多いです。視触診では乳房の腫瘍、胸壁皮膚の発赤や腫瘍、腋窩や鎖骨上リンパ節の腫脹に注意します。上記以外でも気になる症状がある場合には、遠慮なく当院を受診させて下さい。

なお、日常診療において、かかりつけ医で検査を施行頂いた場合には、当院での重複検査を避けることができますので、結果をご教示下さい。

#### \* 採血（腫瘍マーカーを含む）

薬剤の副作用による肝機能障害なども起こりうるので、日常診療の一貫として3-6ヶ月に1回定期的な採血を検討頂ければ幸いです。

腫瘍マーカーは保険診療上、1回/月の測定が認められています。乳がんの定期診療において腫瘍マーカーが有用であるというエビデンスはありませんが、一般的にはCEAとCA15-3の測定を行うことが多いです。腫瘍マーカーが正常域を超えて上昇した場合には、拠点病院への受診を指示して下さい。なお、測定値には個人差もありますので、僅かな上昇の場合には8週後に再検頂き、2回以上続けて上昇した場合に受診を指示頂いても結構です。

## 4. 当院受診の前に

当院定期受診前の診療時には、可能であれば診療情報提供書を記載していただき、患者さんにお渡しください。

## 5. バリエーションと対処法

バリエーション		対処法
再発が疑われるとき	症状がなく、差し迫った生命の危険がないと思われるとき	2週間をめぐりに近畿大学医学部附属病院乳腺外科受診
	症状がある、または差し迫った生命の危険があると思われるとき	電話連絡ののち近畿大学医学部附属病院乳腺外科あるいは救急外来受診

患側上肢の炎症	炎症の治療	抗炎症剤、消炎鎮痛剤の内服 安静
	上記の治療が無効のとき	直近の乳腺外科受診
内服薬(内分泌治療薬)による副作用	肝機能障害	2～4週間休薬後、肝機能を再検し、改善されていれば再開
		改善しないときは、2週間以内をめどに乳腺外科受診
	不正出血	産婦人科受診
		異常がなければ内服継続
高脂血症・体重増加	生活改善	
	改善しないときは、高脂血症治療剤の内服等	

## 6. その他

- ・ 投薬（ホルモン療法剤）については、基本的にかかりつけ医の先生にお願いしております
- ・ 投薬間隔は1～3ヶ月毎（かかりつけ医の先生のご判断）でお願いします
- ・ 副作用等が疑われるときは、先生のご判断で適宜、投薬の中止・再開をしていただいで結構です
- ・ 投薬終了後の通院間隔はかかりつけ医の先生のご判断でお願いします
- ・ 当院での定期受診は10年目までとしています
- ・ 定期受診日以外でも必要があれば当院の受診を患者さんに案内してください

### 【術後補助療法】

手術後に薬物療法を行います。再発のリスクを3-5割減らすことができるとされています。薬物療法は決められた量を決められた期間投与することが重要とされていますが、長期間服用するホルモン療法剤などは副作用などで一定期間休薬しても問題はありません。

#### (使用される薬剤)

- ・ ホルモン療法剤：一般的に副作用の少ない薬剤です。乳がん組織にホルモンレセプターのある場合に使用します。おおまかに三種類の薬剤があります。「タモキシフェン」閉経の有無にかかわらず使用可。経口剤、毎日服用。子宮内膜刺激作用があるため不正性器出血に注意。  
「アロマターゼ阻害薬」閉経後の患者に使用。経口剤、毎日服用。エストロゲン低下により骨粗鬆症が進行する可能性あり。  
「LH-RH アゴニスト」閉経前の患者に使用。3ヶ月に1回皮下注。閉経後と同じホルモン状態となるため、ほてりなど更年期症状が出る。
- ・ 化学療法剤：脱毛、悪心嘔吐、白血球減少などの副作用が出ます。タキサン系の薬剤の場合、指先の痺れや下肢の浮腫が長く残る場合があります。3週間に1回点滴を行い、3-6ヶ月間治療を行います。まれにUFTなどの経口抗癌剤を投与することがあります。この場合は白血球減少や肝機能障害に注意が必要です。
- ・ 分子標的薬： Her2 蛋白が発現している乳がんには効果があります。3週に1回、点滴にて1年間投与します。

## 7. お問い合わせ先

近畿大学病院 患者相談課

がん地域連携パス担当

電話 072-366-0221 (代表) 内線 6804・3803